

# 保育分野におけるコミュニケーションロボットの活用可能性を探る —乳幼児の親対象としたインターネット調査による検討—

佐久間 路子

## 研究実績の概要

保育・幼児教育においては、「温かい触れ合い」や「一人一人の特性に応じた指導」（幼稚園教育要領解説，2018）といった、温かさや個別のかつ臨機応変な対応が保育者には求められており、保育者の役割を代替できるようなロボットは開発されていないのが現状である。しかし保育分野では深刻な人材不足もあり、保育の多様な仕事の一部を担うロボットが開発され、保育所でのロボットの活用が始まっている（例：VEVO\*1）。このようなロボットの活躍が期待される一方、人間性、情動性、臨機応変な対応が求められる保育・幼児教育分野へのロボットの活用に対しては、否定的意見も根強いと考えられる。ロボットを活用した先駆的な取り組みが進む現在において、ロボットを受け入れる側の意識を明らかにすることは極めて重要であろう。

佐久間は2018年度研究助成金「ロボットに対する肯定的・否定的意識および保育・教育への導入に対するニーズの検討—大学生および保育者を対象として—」において、大学生および保育者に調査を行った。2019年度は、それら調査のうち、教育系大学の学生384名（男性110名、女性274名）を対象としたアンケート調査の自由記述のデータをもとに、コミュニケーションロボットを保育・教育分野に導入することに対する肯定的・否定的意識について分析を行い、日本乳幼児教育学会第29回大会にて発表した\*2。肯定的意見は対象者の74.7%が記述し、コミュニケーションロボットの「人より優れた特徴を肯定的に認める意見」や、「保育現場での人手不足解消のための限定的な活用」などがあつた。否定的意見は対象者の96.6%が記

述し、「臨機応変な対応や心の読み取りの課題」や「人間性の欠如」などがみられ、さらに「子どもへの否定的影響」「保育・教育は人がすべき」「ロボットは信頼できない」など、ロボットに対する根強い否定的意識があることが明らかになった。

また2020年2月に乳幼児期の子ども（0～6歳）を育てている親500名（男性280名、女性220名）を対象に、インターネットによるアンケート調査を行い、保育分野にロボットを導入することについての意見をたずねた。本調査の結果は現在分析中であるが、結果の一部を述べると、保育分野における仕事の代替可能性については、保育園や幼稚園で子どもの遊び相手をするということについては約40%が肯定的な回答（まかせられる・少し任せられる）を選択していたが、子どもの見守りや保育を担当することについては否定的な回答（全くまかせられない、あまりまかせられない）が約40～60%と多いことが明らかになった。今後は、保育分野にロボットを導入することに対する意見の自由記述データの質的な分析を行い、大学生の調査結果との比較を行うとともに、保育分野におけるロボットの活用可能性について考察していきたい。

\*1 <https://vevo-robot.com/>

\*2 佐久間路子・倉持清美(2019) コミュニケーションロボットを保育・教育分野に導入することへの意識、日本乳幼児教育学会第29回大会、東北文教大学